CORE

東京外大 東南アジア学 Southeast Asian Studies TUFS No. 26, 24-42, 2020

# 現代口語ビルマ語の情報構造について ―左方移動・右方移動を中心に―

On Information Structure in Colloquial Burmese

岡野

Kenji Okano

東京外国語大学総合国際学研究院

Institute of Global Studies, Tokyo University of Foreign Studies

**Abstract** 

In this article, some phenomena about operating the informational structure of colloquial Burmese, where some "movements" of immediate constituents in a clause may be related to, will be dealt. Burmese is a typical predicate-final language and the order besides a predicate are fairly free. In addition, some elements can be omitted if they can be known by some means. So the "standard" order of constituents like a subject, object or other complements is hard to be predictable, but normally object tends to occur just in front of the verb. We should consider that the informational operation by changing the constituent order is quite relative. Here, although there is some limitation to syntactic operation in this language, phenomena like left and right dislocations are treated. In general, it can be said that left dislocation may be related to contrastive meaning, and right dislocation focus meaning.

キーワード:ビルマ語,左方/移動,コピー動詞構文,焦点,取り立て

Keywords: Burmese, left or right dislocation, copy-verb construction, focus, contrast

はじめに

本稿では現代口語ビルマ語の情報構造の中で、特に焦点の文法構造について検討する。1



本稿の元となるのは峰岸(2019)の調査で、同様の調査をビルマ語で行ったものを元に 口頭発表している(岡野 2020)が、ビルマ語の文法構造はタイ語と異なり、日本語のそ れに非常によく似ているため、情報構造においてもそれは当てはまる部分が多い。本稿 は新たに調査し、扱うものを左方移動、右方移動およびそれに関連する現象に絞って稿 を改めた。

本稿ではコンサルタント<sup>2</sup>への聞き取り調査を元に、主として左方移動、右方移動と 情報構造との関係について記述する。

なお本稿の音表記は岡野(2019a)に、また略号は岡野(2019b)に従った。

# I. ビルマ語の基本的な統語構造および情報構造に関わる要素

本章では現代口語ビルマ語の統語構造および情報構造に関わる要素について概観する。ビルマ語の文構造は大まかにいうと以下のような特徴がある。

- 1. 述部末尾型である。
- 2. 自立語の後ろに付属語がついて関係標示する。
- 3. 自立語の前に限定要素が現れる。3
- 4. 復元可能な要素は比較的省略されやすい。

節内の要素の順序,いわゆる語順は他動詞文で目的語が動詞の直前に来やすかったり, 時や場所を表す句は主語よりも前に出やすいという傾向はあるが,絶対ではなく,比較 的自由であるといえよう。なおビルマ語は主格対格型言語であり,能格的な構文はほと んど見られない。

上記 1., 4.の特徴は語順に関わる特徴,制約と言える。これに対し 2.の特徴は従属部の表示の問題であり、これもまた情報構造に関わる。文に現れる名詞的な要素の関係表示をする語類には文法関係を表す格助詞と、談話をマークする副助詞とがある。基本的な項 (A, S, P) や着点の補語が無標で現れることがあり、これらを表す格助詞が生起することで有標の主語、目的語、着点の補語となることから、少なからず情報構造に影響する。副助詞については言うまでもないであろう。

#### 1. 現代口語ビルマ語の文構造

ビルマ語の文構造の最も重要な特徴は節の述部が末尾に現れることである。複文にお

いても主節の述語が末尾に現れ、従属節はそれに先行する。主節の述語より後ろ(右方)に現れる要素は文と構造的に関係を持っていないか、「破格文」であるといってよい。

b.?? သူ ပြောတတ်တယ် ခင်ဗျ ဂျပန်စကား(ကို)။  $\dot{t} \grave{u} \qquad py\acute{5} = \dot{t} \grave{a}? = t \grave{e} \qquad k^h \check{a} my \hat{a} \qquad dz\check{a} p\grave{a} \text{N-z} \check{a} g\acute{a} (= \dot{k} \grave{o}).$   $3 \text{SG} \qquad \text{Speak} = \text{AUX} = \text{VS.RLS} \qquad \text{UFE} \qquad \text{Japanese-language} (= \text{ACC})$ 

彼/彼女は話せます。日本語が。

上記 a.は述部が文末に現れるという点で基本的、あるいは標準的な文といえる。述部は動詞文標識 verb sentence marker: vs によって形成される<sup>4</sup>。a.において述部の後に現れる要素を本稿では発話末要素 utterenace final element: UFE と呼ぶことにする。発話末要素は、それより前に現れる文とは統語的な関係を持たない、文からは独立した要素であるが、発話単位においては前の文と関係している。なお発話末要素は終助詞 sentence final particle: SFP とは区別される。終助詞は述部内の要素である。発話末要素は基本的に話し言葉のみに現れる対人的な要素であったり、感情表出的な要素である。

一方 b.は文内の要素が述部より後ろに現れている「破格文」である。一種の倒置が起こっていると考えられる。述部、あまつさえ発話末要素の後ろに節内の要素が現れるのは相当に不自然で、容認不可能とさえ感じられるということである。発話末要素があると、その前で文は終わっていると感じられるため、b.を言語的に一つのまとまりを成すとはいいにくいと考えられる。

またビルマ語は会話参加者にとって状況や知識から復元可能な要素は省略可能である。視点を変えれば、省略は情報構造上の理由から生じる、とも言えるだろう。ただ本稿では省略は特に扱わないことにする。

以上は述部が一つの単文の場合だが、従属節を伴う複文においても常に主節の述部が 最後に現れる。従属節が主節要素によって分離されることはほぼあり得ないが、主節の 要素内に従属節が割って入ることは不可能ではない。ただし非常に不自然になる場合が ある。

このようにビルマ語は述部が文末に現れるという点以外は要素の生起の順序はある 程度自由である。

### 2. 名詞類に付く後置詞と情報構造

ビルマ語は自立語に後置詞である助詞類がついて様々な関係を標示する。名詞に付く助詞としては先に述べたように文法関係を表す格助詞と談話的な働きをする副助詞がある。文法関係を表すと考えられる名詞類,つまり格名詞(澤田 1998:7)もあるし,文法関係を表すだけの小さな節構造もあるが,本論では扱わない。

本稿では主語を表す主格助詞、目的語を表す対格助詞、着点を表す向格助詞を主として扱う。前述のように、これらの要素は無標で現れることがあるからである。

(3) a. シ へのの必用 は は は は は は は は は は は は は は は は な が来た。

b. 知の いのい。
tù=ţâ là=ţè.
3sG=NOM come=VS.RLS
(他ではなく)彼/彼女が来た。

(4) a. めっぱ o o か o か o い s a ? o u ? w è = ţ è .

book buy=VS.RLS
本を買った。

b. すっぱい のいのい のいのい sà?ou?=kò wè=ţè.
book=ACC buy=VS.RLS
(他ではなく)本を買った。

(5) a. ကျောင်း သွားတယ်။ tçáun twá=tè.

b. ကျောင်းကို သွားတယ်။ tçáun=kò twá=tè. school go=vs.rls

school=ALL go=VS.RLS

学校へ行った。

(他ではなく)学校へ行った。

上記(3)~(5)の a.はそれぞれ無標, b.は格助詞がついた有標の形式である。特に文脈等が与えられていなければ a.の形式がより自然である。b.では日本語訳の丸括弧()内の意味「他ではなく」を必ずしも伴うわけではないが、そのようなニュアンスを持つことが普通である。なおここでのニュアンスは、聞き手の予想や推測と異なっている(と話し手が信じている)ことを表していて、必ずしも新情報というわけではない。強調、訂正などをする場合に用いられることが多いようである。また有標の場合、一般的に無標より名詞の特定性が高い。

なお+human の名詞が目的語である場合,通常,無標では許容されない。主語と区別が付かなくなるからである。

(6) a.\* အစ်မ ခေါ်တယ်။ ?ămâ kʰð=ţὲ. elder.sister call=vs.RLs (姉を呼んだ。)

b. အစ်မကို ခေါ်တယ်။ ?ămâ=kò kʰð=ţè. elder.sister=ACC buy=VS.RLS 姉を呼んだ。

次に副助詞であるが、いわゆる強調の意味で用いられる副助詞類は非常に多い。このなかで口語体において非常に多く使われるのが- $\grave{o}$ -pé《焦点》で、本稿において焦点とは新情報のうち情報的に最も特立性が高い部分をいう。 $\grave{o}$ -pé は様々なコノテーションを持つ。大野(2000: 461)は $\check{o}$ -pé(ただし大野は伝統的な綴りである- $\hat{o}$ -bé としている)を「先行名詞の強調」「文末で使用、断定、叙述を表わす」と、また Okell and Allott(2001: 121-2)は文末に現れる要素として emphatic,文中に現れる要素として emphatic と just, only の意味としている。一方、コンサルタントの Thuzar Hlaing 氏は「~だけ」の意味がある、と発言した。ただ筆者は《排他》「~だけ」 の意味は焦点の意味から生じるコノテーションだという立場である。本稿では焦点を表すものとして説明を試みる。

(7) a. ကျမ**ဘဲ** ပြောပါ့မယ်။ tçămâ = **pɛဴ** pyɔ́ = pâ = mè. 1sg.fs=**DM.**foc speak=PLT=VS.IRR

この私が話します。

(大野 1983: p.197, 下線は筆者)

岡野賢二

文脈的対比で用いられる副助詞には $-\cos_{2}-t\hat{a}$ 《対比》「 $\sim$ は(というと)」, $-\infty$ 处: -1£《付加》「 $\sim$ も」などがある。 $^{7}$ (以下,KS,KS,MM 等は人名。)

-心分:-lé「~も」は平叙文、疑問文とも現れるが、-com -tô「~は(というと)」は平叙文のみに現れる。なお対比の副助詞は、一文内に原則として一つしか現れない。

# II. 左方移動

すでに述べたとおり、ビルマ語は述部が文の末尾に現れることのみが「決まって」おり、その前に現れる文要素の順序はある程度自由である。ただ一般に標準的と見なされるのは SOV の語順である。

以下では標準的な語順において無標で現れる目的語,着点,主語の左方移動について順に観察し,最後に述部の移動について考察する。

#### 1. 目的語の左方移動

目的語は一般に動詞の直前に置かれる傾向があり、主語は目的語に先行する。

tçănò sà?ou?(=kò)  $p^ha$ ?=tè. 1sg.ms book(=acc) read=vs.rls

私は本を読む/読んだ。

b. စာအုပ်ကို ကျွန်တော် ဖတ်တယ်။ (有標) sà?ou?=kò tçănò pʰa?=tè. book=acc 1sg.ms read=vs.rls

本を私は読む/読んだ。

(10)a.では目的語が動詞の直前にあり、主語がそれらに先行するという、語順としては最も無標と考えられる。(10)b.は主語と目的語の順番が入れ替わっている。これを目的語の左方移動と考えるか、主語の右方移動と考えるか、であるが、繰り返すが、ビルマ語は他動詞の直前に目的語が生起するのが最も自然であると考えられることから、目的語がデフォルトの位置から前へ移動した、すなわち左方移動と見なすべきであろう。

目的語が動詞の直前にない場合,あるいは主語よりも前に現れる場合,通常そこが強調されると感じられるようだ。語順として有標で,情報的に有標である。またこのとき,対格標識-%-kò による目的語の標示が強く要請される。(10)a.のように動詞の直前に+human ではない目的語が現れる場合,対格標識が現れると「(他ではなく)」というニュアンスを持つが,(10)b.は統語構造がわかりにくくなるために対格標識の生起がほぼ義務的になると考えられ,「(他ではなく)」というニュアンスは必ずしも生じない。

コンサルタントへの聞き取りにおいて目的語の左方移動と見られる例が見つかった。

コンサルタントからの当初回答は(11)a.であった。述部の動詞 の:- sá-「食べる」は明

(11)はいずれも述部が名詞節標識 noun clause marker; NCで導かれている(III.3 も参照のこと)。そこで述部を動詞文標識 verb sentence marker; VS にした例も確認した。

このとき,動詞 の: sá-「食べる」の意味上の目的語である ネッ や ? î = môun 「そのお菓子」が主格標示の場合の容認度が非常に下がり、ほぼ容認不可能である ((12)a)。一方、対格標示の場合はまったく容認可能だ。このことから、少なくとも(11)a.において、動詞の意味上の目的語は、統語的に動詞との文法関係はなくなっており、主題化されているとみるべきであろう。

#### 2. 着点の左方移動

着点の補語についても事情は目的語とよく似ていて、着点の補語は移動を表す動詞の 直前に置かれる傾向が強い。

(13)a.は語順として無標である。向格標識-% -kò は通常は現れないが、現れる場合は「(他ではなく)」というニュアンスを伴うことが多い。一方(13)b.は着点の補語が移動を表す動詞の直前にないという点で、やはり語順として有標であるといえるだろう。目的語の場合と異なり、着点の補語が主語より前に現れる場合はほぼ向格標識の生起が必須となる。-humanの目的語の場合より、意味的な有標性が高いようだ。

### 3. 主語の左方移動

主語はそれ以外の文構成素にくらべて前(左方)に現れやすい傾向がある。そのため 左方移動という現象自体があるかどうかをはっきりと認定することは困難である。時や 場所の句は一般に主語に先行することが多いとはいえるものの、それらの順番が情報構 造上の意味に与える影響についてははっきりしたことは言えない。

(14)	a.	ကျွန်တော်	မနေ့က	ကျောင်း(ကို)	သွားတယ်။
		tçănò	mănêga	tcaun(=ko)	$tw = t\hat{\epsilon}$ .
		1sg.ms	yesterday	school(=ALL)	go=VS.RLS
		私は昨日,	学校へ行った。		

(14)a., b.とも自然な文である。どちらが選ばれるかは確かに情報構造が関わってはい

るものの、どちらをより標準的であると判断することは難しい。敢えていうなら、文頭に来る要素が主題として提示されているいうことであろう。これに比べて c.は容認可能であるものの、かなり不自然である。コンサルタントによれば「ωςςς mănêga 『昨日』を言い忘れて、急遽動詞を直前に入れたという印象」ということである。

なお主語を情報構造として有標にするには、格助詞もしくは副助詞を用いると考えられる。以下の例は語順としては全て無標、すなわち SOV である。

(15)	a.	ကျွန်တော်	ဒီစာအုပ်(ကို)	ကြိုက်တယ်။
		tçănò	$d\hat{i} = s\hat{a}?ou?(=k\hat{o})$	tçai?=tè.
		1sg.ms	this=book(=ACC)	like=vs.rls
		私はこの本が好きだ。		
	b.	ကျွန်တော် <b>က</b>	ဒီစာအုပ်(ကို)	ကြိုက်တယ်။
		tçănò= <b>ķâ</b>	$d\hat{i} = s\hat{a}?ou?(=k\hat{o})$	tçai?=tè.
		1sg.ms=Nom	this=book(=ACC)	like=VS.RLS
		私がこの本が好きだ。		
	c.	ကျွန်တော်( <b>က</b> ) <b>ပဲ</b>	ဒီစာအုပ်(ကို)	ကြိုက်တယ်။
		tçăn $\delta(=\mathbf{k}\mathbf{\hat{a}})=\mathbf{p}\mathbf{\hat{\epsilon}}$	$d\hat{i} = s\hat{a}?ou?(=k\hat{o})$	tçai?=tè.
		1sg.ms(=NOM)=DM.foc	this=book(=ACC)	like=VS.RLS
		私 <b>こそ/だけが</b> この本が	好きだ。	

d. ကျွန်တော်**ကတော့** ဒီစာအုပ်(ကို) ကြိုက်တယ်။ tçănò=**ķâ=ţô** dì=sà?ou?(=kò) tçai?=tè. 1sg.ms=NOM=DM.cntr this=book(=ACC) like=VS.RLS 私はというとこの本が好きだ。

(15)b.は主語が主格助詞によって標示されており、「(他ではなく)」というニュアンスを伴う。特にこの例文のように+humanの主語、-animateの目的語の場合、そのようなニュアンスがかなり明確である。(15)c.は焦点の副助詞が現れる例で、排他「こそ、だけ」といったコノテーションを持つ。排他は必ずしも新情報とは限らないが、焦点を表す副助詞が排他のニュアンスを持つ場合、これを焦点の一種とみなし、新情報と考えたい。主格助詞が現れる場合もそうでない場合もあるが、あまりはっきりとした意味やニュア

ンスの違いはないようだ。(15)d.は主格助詞の後に対比の副助詞が現れる例で、「私の場合は…」といった対比的な主題を表す。対比そのものは新情報とは必ずしも限らない。 主題なのでここでは旧情報と見るのがよいだろう。

主語の場合,対比の副助詞が表れるときには主格助詞も生起することがしばしば観察される。-mcom-kâ=ţô-NOM=DM.cntrをここでは分析的に解釈したが,共時的には一つの意味(主題化)を担う形式としてかなり定着していると解釈したほうがよいかもしれない。

#### 4. それ以外の要素の左方移動

前節で少し見たが、主語、目的語、着点以外の要素については、必ずしもデフォルトの語順があるとは認定しづらい。起点の補語と着点の補語が現れる場合、ほぼ 100%起点が着点の直前に置かれるが、着点の補語がなければ比較的自由になるケースもある。また副詞などは動詞の直前に置かれやすく、場合によっては目的語と動詞述部との間に入る方が自然であることもある。

要素間の関係などが複雑に絡み合う問題であり、より詳しい調査を要するため、これ については稿を改めたい。

#### 5. 述部の左方移動の可能性

述部は左方移動すると見なせるであろうか。一文内(と仮にしておく)生起する要素が非常に少ない場合は述部の移動のように見えるかも知れない(例えば(1).b など)。

述部そのものが移動するわけではないが、文脈対比の副助詞によって、述部の動詞の一部、あるいは動詞+助動詞が前方に「コピー」される構文がある(澤田 1998、岡野 2007、Ozerov 20178他)。

- - b. သောက်**လည်း** သောက်တယ်။ မူး**လည်း** မူးတယ်။ tau ta

drink=DM.cntr drink=VS.RLS be.drunk=DM.cntr be.drunk=VS.RLS 飲むも飲んだし、酔いも酔った。

c. のかめがいがいいいのでは、 いっというでは、 いっというでは、 いっというでは、 いっというでは、 いっとのでは、 いっ

文脈対比の副助詞は通常,文の構成素に後接する(例文(8),(9))。しかし述部の表す 事態を対比するために上記(16)では述部の一部が述部の直前にコピーされ,対比の副助 詞を添えることで,述部が文末に生起しなければならないという要請と事態を対比する という文脈的な要請を同時に満たす構文であると言える(岡野 2007: 164-5)。これは「移 動」とは言えず,また文頭に取り立てられる要素が生起するわけではないが,述部の表 す事態を取り立てるという点で,本章で扱った左方移動に準ずる構文と言えるであろう。

# III. 右方移動

文の構成素を後ろ(右方)へ移動するというのは、実質的に述部より後ろに、その述 部によって形成される文内の要素が生起する、ということと考えてよいだろう。

#### 1. 倒置

倒置とは修辞的効果を狙う場合や, 言い足しなどで通常の語順を取らないことである。 「通常の語順を取らない」という意味では前章の左方移動も該当するが, 本稿では所与 の述部で形成される節内要素が, その述部よりも後ろ(右方)に現れることに限ること にする。

再び例文(1)を取り上げる。例文(1)における a.文が通常の語順, b.が倒置が起こっている。

(1) a. ユ 이បန်စကား(ကို) ပြောတတ်တယ် ဗျာ။
tù dzăpàn-zăgá(=ţò) pyó=ţa?=tè byà.
3sG Japanese-language(=ACC) speak=AUX=VS.RLS UFE
彼/彼女は日本語が話せます。

彼/彼女は話せます。日本語が。

前述の通り、これは後置された要素が、述部で形成される節の要素であることは自明であるが、構造的には発話末要素によってその後ろの部分とは断絶されている。言い換えると afterthought である。言語的にひとまとまりでないとすれば、全体を「文」と呼ぶことができないだろう。

発話末要素が現れず、終助詞が現れている(17)のようなケースでも母語話者は「断絶されている」と感じるようだが、(1)b.に比べると容認度は上がるという。容認度が上がる理由については今のところ不明である。

以上は節内の要素が後置される例であり、節内にはギャップが生じると考えられる。 一方、ギャップが生じないケースもある。コピー動詞構文 (II.5) のように節内の要素が 文終了後に繰り返される。

(1)b., (17)が容認度は決して高くないものの,節内にギャップが生じる「移動」であったのに対し,(18)は節内にギャップは生じない。述部の後ろに現れる要素は節内のものと同一形式であり,いわゆる念押しをして強調したい部分ということになる。その点で情報構造的にギャップが生じる afterthought とは全く異なると言える。

### 2. 焦点後置文

焦点後置文はいわゆる焦点が後ろ(右方)に置かれる擬似分裂文である。元々の文の 述部は名詞節標識によって形成される(澤田 1998: 30, 岡野 2007: 128-9)。

- - b. မနေ့က ဦးချစ်ဆိုင်မှာ တပည့်တွေနဲ့ စကားပြော**တာ** ဆရာဦးမြ။
    mănêgâ ʔútçʰiʔ-sʰàiɴ=hmà dăbɛ̂=ţwè=nɛ̂ zăgá+pyó=ţà sʰăyà-ʔúmyâ.

    yesterday UC-shop=Loc pupil-PL=COM language+speak=NC.RLs teacher-UM
    昨日ウー・チッ喫茶店で教え子たちとお喋りしたのはウー・ミャ先生だ。
  - c.ဆရာဦးမြဦးချစ်ဆိုင်မှာတပည့်တွေနဲ့စကားပြော**တာ**မနေ့က။shaya-ʔúmyâʔútçhiʔ-shàin=hmàdăbê=ţwè=nêzăgá+pyó=ţãmănêgâ.teacher-UMUC-shop=Locpupil-PL=COMlanguage+speak=NC.RLsyesterday.ウー・ミャ先生がウー・チッ喫茶店で教え子たちとお喋りした**の**は昨日だ。
  - d. ဆရာဦးမြ မနေ့က တပည့်တွေနဲ့ စကားပြော**တာ** ဦးချစ်ဆိုင်(မှာ)။  $s^h$ ăyà-ʔúmyâ mănêgâ dăb $\hat{\epsilon}$ =ţw $\hat{\epsilon}$ =n $\hat{\epsilon}$  zăgá+pyó=ţâ ?út $\hat{\epsilon}^h$ i?- $s^h$ àin(=hmà). teacher-UM yesterday pupil-PL=COM language+speak=NC.RLS UC-shop(=Loc). ウー・ミャ先生が昨日 教え子たちとお喋りした $\boldsymbol{\sigma}$ は $\underline{\dot{\sigma}}$ -・チッ喫茶店( $\underline{\dot{\sigma}}$ )だ。
  - e. ဆရာဦးမြ မနေ့က ဦးချစ်ဆိုင်မှာ စကားပြော**တာ** တပည့်တွေ(နဲ့)။ sʰǎyà-ʔúmyâ mănêgâ ʔútçʰiʔ-sʰàin=hmà zăgá+pyó=ţâ dǎbɛ̂=ţwè(=nɛ̂). teacher-UM yesterday UC-shop=Loc language+speak=NC.RLs pupil-PL(=COM). ウー・ミャ先生が昨日ウー・チッ喫茶店でお喋りしたのは<u>教え子たち(と)</u>だ。 (以上,岡野 2007:129,ゴシック等は引用者)

焦点後置文は名詞節標識で作られる節が前提であり、その後ろに述部として、焦点が 置かれる要素が現れる。この焦点となる要素は名詞節の補語であり、つまり名詞節内に ギャップが生じていることになる。右方移動によって、移動された要素に焦点を当てて いる、と言うことができる。

(1)b., (17), (18)と異なるのは、この焦点後置文は完全に文法的(grammatical, well-formed) であることだ。決して文として破格ではない。

#### 3. 述部の焦点化:いわゆる「のだ文」

取り立てがそうであったように、述部もまた焦点化を行うことが可能だと思われる。 ビルマ語には、日本語で言うところの「のだ文」がある。前節の焦点後置文の前提に現 れる名詞節標識によって作られる句が述部に現れるものである(Okell 1969, 澤田 1998, 熊谷 2009、岡野 2011)。いわゆる名詞節の主節用法 stand-alone nominalization と言って よい。

- - b. 内場をのが ⊌場をの のやのです。
     b. 内間をのが はないのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。
     comのです。

ビルマ語の名詞節の主節用法には様々な意味があるが,一般に名詞節は「それが真であることが発話の前提」と考えられる。前提は一般に旧情報と言えるが,それを「わざ

わざ」主節として表現という点で、そこが焦点のような際立ちを持つと考えてよいかも しれない。

筆者の主観的な印象だが、名詞節の主節用法の場合、文末に焦点を示す副助詞- $\grave{\mathbf{0}}$ -pé が出やすいと思われる。 $^{10}$ 

(22) ဝမ်းသာပါတယ် ခင်ဗျာ။ သိပ်ဝမ်းသာ**တာပဲ**။

 $w\acute{u}_N + t\grave{a} = p\grave{a} = t\grave{e}$   $k^h \breve{a} my\grave{a}$   $tei? \sim w\acute{u}_N + t\grave{a} = t\grave{a} = p\acute{e}$ .

 $stomach+pleasant=\texttt{PLT}=\texttt{VS.RLS} \qquad \quad \text{UFE} \qquad \quad very{\sim} \ stomach+pleasant=\texttt{NC.RLS}=\texttt{PLT}$ 

I am delighted, Sir. I really am delighted.

(Okell and Allott 2001: 121)

なお動詞文標識には直接副助詞 $-\dot{o}$ -péが付けられない言語事実は記しておかねばならないだろう。

一点,注意すべき点を記しておく。II.1「目的語の左方移動」における例文(11),(12)で見たように,目的語が文頭位置に移動し,かつ主格標示を受けるケースがあった。この場合,文末の動詞述部を形成するが動詞文標識の場合は容認できず,必ず名詞節標識である必要がある。これも一見してた名詞節の主節用法(あるいは「のだ文」「tà・hmà文」とも)と同じものであるように見える。しかしここで述べた名詞節の主節用法(あるいは「のだ文」「tà・hmà文」とも)は格標識の「ズレ」は生じておらず,左方移動がきっかけとなっているというわけではないという点で,本節のものとは異なる。これが構造的な相違があるのかどうかについては今後の課題としたい。

#### 4. 副助詞による焦点化について

これまで見てきたように、焦点を示す副助詞- $\mathring{\mathbf{o}}$ -pé は文の要素について、それが付いた要素を焦点にするという機能を持っていると考えられる。ということは、ある構成素に焦点を当てるには、副助詞- $\mathring{\mathbf{o}}$ -pé を付加するだけでも可能ということになる。

副助詞 $-\grave{o}$ -pé と対比の副助詞とは情報構造的な効果は異なる。しかし(これも筆者の主観的印象ではあるが)副助詞 $-\grave{o}$ -pé も一文内に一つ以上現れることはあまりない点は共通しているように思われ、いずれも談話的な機能を担う機能語と考えていいと思われる。

## IV. まとめ

本稿では左方移動、右方移動を中心に、情報構造に関わる統語的なバリエーションについて概観した。多くの言語でも見られるように(福地 1985 など)、ビルマ語において左方への移動は主題化という意味合いが強く、右方への移動は焦点化という意味合いが強いことが観察された。ただしビルマ語の統語的制約から、左方向への移動は構文の変更を伴わずに比較的やりやすいのに対し、右方向、すなわち述部よりも後ろに現れるような移動は構文的な変更(焦点後置文)を伴うか、一文あるいはひとまとまりとは見なせない形式(afterthought や繰り返しによる強調)にならざるを得ない。ということは述語の後ろの位置は情報構造的に相当に有標であると言えるだろう。

また主語や時を表す句などは文頭に現れやすい傾向がみられることから、これらが文頭に現れていてもそれが移動の結果であるとは言えない。そもそも主語や時を表す句などは主題として理解されやすい、といえよう。その位置を離れる方が情報的により有標な形式である可能性が高い。

主題化とは異なるが、取り立ては対比の副助詞が後接することによって表されることがある。あくまで対比がその形態素の機能であるが、取り立てという情報構造上の効果があると言えるのではないだろうか。対比の副助詞と左方移動は完全には重ならないものの、親和性は高いと思われる。本稿では触れなかったが、対比の副助詞が付いた句は文末には現れないこともその傍証となるだろう。

述部は基本的に生起する位置が文末に固定されているため、そのままでは移動の対象にならない。そのため主題化とは異なるが、談話的な対比を表すために動詞述語の全てまたは一部をコピーして前置し、それに対比の副助詞を使うコピー動詞構文が用いられる。

一方,焦点化の機能を持つ副助詞もある。焦点化は副助詞によって語順等を変更することなく実現可能である。述部にも名詞節の主節用法であれば焦点の副助詞を添えることが可能である。というより,述部はそれ自体によって焦点の位置を生じさせているのであり,述部そのものを「焦点の位置」に移動させることは原理的に不可能である。そういう意味で副助詞によってのみ述部を焦点化できると見てよいだろう。

### 注

- <sup>1</sup> 本稿は科学研究費(基盤研究(B))課題番号:18H00686「アジア諸語の言語類型と社会・文化的多様性を考慮した CEFR 能力記述方法の開発研究」(代表者・富盛伸夫),同(基盤研究(B))課題番号:17H02331「形態統語論と音声学からみた東南アジア諸語における情報構造の類型論」(代表者・峰岸真琴),同(基盤研究(B))課題番号:20H01255「代名詞代用・呼びかけ表現の通言語学的研究」(代表者・齋藤スニサー)の助成を受けたものです。
- <sup>2</sup> 本文にも述べたように、本稿は岡野(2020)をベースにしているが、その時のコンサルタント(Myat Nay Chi Tun さん、ヤンゴン大学法学部学生、調査当時は東京外国語大学に留学中、女性、ヤンゴン出身)への調査結果を一部使用しているが、基本的に全ての例文を本学准教授の Thuzar Hlaing 先生(女性、ヤンゴン出身にチェックしていただいた。お二人にこの場を借りて感謝致します。なお本稿についての責任は筆者にある。
- <sup>3</sup> 名詞の後ろに, それを意味的に限定していると見なすことが可能な要素が現れる構造もある。

?ălou?káungáuntă-khûworkgood.RDPone-CLF

ただこれらを筆者は同格構造であると見なし、後続する要素が前の要素を統語的に限定しているとは考えない。

- <sup>4</sup> 動詞文標識により述部が形成されるタイプ以外に,名詞節標識 noun clause marker: NC が主節として用いられる文,いわゆる stand-alone nominalization や,特に文標識を伴わない非動詞述語文がある。
- <sup>5</sup>-ペか-lai?は〈決然性〉を表す助動詞とされるが、意志動詞と共に使われると、動作を最後までやり切る、という意味になると考えられる。
- 6 《排他》のみを表す副助詞-xx -tà 「~だけ、~のみ」もあるが、これには焦点化の機能はない。つまり新情報でも旧情報でもあり得る。
- <sup>7</sup> このほかに、 $-\epsilon m$ -kó《対比疑問》「~は(どう)?」があるが、これは疑問文だけでなく平 叙文にも現れる。平叙文の用法は列挙の助詞 $-\epsilon p$ -yó(~kó)との混同である可能性もある。 本稿では $-\epsilon m$ -kó は扱わない。
- <sup>8</sup> Ozerov, Pavel 2017 *Copy-verb Constructions in Tibeto-Burman and byond* (筆者未見)。Ozerov, P. "Copy-verb constructions in coloquial Burmese" (参考文献参照) の内容を参照した。
- 9 コンサルタント Thuzar Hlaing 氏によれば、この文(20)b.の場合は目的語 3 dà「これ」が対格標識で標示されていないと不自然であるという。これに対し(20)a.では明示的に対格標示されていなくても自然とのこと。
- <sup>10</sup> この点は大野 (2000: 461) や Okell and Allott (2001: 121-2) が文中に現れる用法と、文末に現れる用法とを別の辞書項目として立てていることからもうかがい知れるし、コンサルタント Thuzar Hlaing 氏もそのような筆者の印象をサポートする発言があった。なお筆者は文末用法と文中用法とを区別する必要はないと考える。

# 参考文献

福地肇. 1985.『談話の構造』. 新英語文法選書第10巻. 大修館書店.

峰岸真琴. 2019. 「タイ語の情報構造に関わる諸表現」. 『慶應義塾大学言語文化研究所
紀要』50: 189-204.
(https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006
9467-00000050-0189)
大野徹. 1986. 『現代ビルマ語入門』. 泰流社.
2000. 『ビルマ(ミャンマー)語辞典』. 大学書林.
岡野賢二. 2007. 『現代ビルマ(ミャンマー)語文法』. 国際語学社.
2011. 「現代口語ビルマ語の名詞化節について」. 東京外国語大学国際日本研
究センター [編]『日本語・日本学研究』no.1, p.13-31.
(http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/64556)
2019a.「日本語とビルマ語の相互変換における問題点—人物を指示する名詞
周辺の現象—」『東京外大東南アジア学』第 24 巻,pp.55-79.
(http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/92935)
2019b.「特集「否定,形容詞と連体修飾複文」ビルマ語データと記述—語研
論集第 23 号特集補遺—」『語研論集』第 24 号, pp.325-357, 東京外国語大学語
学研究所. (http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/94767)
2020.「ビルマ語の情報構造」. 言語の類型的特徴をとらえる対照研究会第 13
回オンライン発表会,2020年8月1日.(口頭発表のハンドアウト)
Okell, J. and Allott, A. 2001. A Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forma. Curzon
Press.
Ozerov, P. "Copy-verb constructions in coloquial Burmese"
(https://www.academia.edu/12755652/Copy_Verb_construction_in_Burmese)
澤田英夫. 1992. 「現代口語ビルマ語の名詞節標識-ta_・-hma_の用法・機能」. 『言語学
研究』京都大学言語学研究会第 11 巻,11-61.
(https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/handle/2433/87971)
1998. 『ビルマ語文法(2 年次)』1999 補訂
(http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram2.pdf)
1999. 『ビルマ語文法(1 年次)』.
(http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burtexts/burgram1.pdf)